

特 231

255

早稻田大學
教授 稻毛金七稿

本稿
心理學綱要

東京 世界堂書店刊行

505



始



時231
255



早稻田大學
教授 稻毛金七稿

本稿
心理學綱要

東京 世界堂書店刊行



目次

第一篇	心理學とは何ぞ	一
第一章	心理學の定義	一
第二章	心理學の意義	二
第一節	心理學の語義	二
第二節	心理學の本質	四
第三節	心理學の方法	六
第四節	心理學の體系	九
第三章	心理學の價值	二二
第四章	心理學の發達	二七
第二篇	意識論	三二
第一章	意識	三二

第一節 意識の本質……………二
 第二節 意識と身體……………二四
 第二章 人格……………二六
 第三章 自我……………三一
 第四章 個性……………三三
 第一節 概説……………三三
 第二節 性格……………三五
 第三節 氣質……………三七
 第四節 知能……………四〇
 第五章 注意……………四三
 第六章 意志……………四七
 第一節 概説……………四七
 第二節 複雜意志—執意(意思)……………五一

第三節 單純意志—衝動及び本能……………五三
 第一項 序説……………五三
 第二項 衝動……………五五
 第三項 本能……………五七
 第七章 感情……………六〇
 第一節 概説……………六〇
 第二節 複雜感情……………七〇
 第一項 情緒……………七〇
 第二項 情操……………七四
 第三項 複合感情……………七六
 第三節 單純感情……………七六
 第八章 理智……………八二
 第一節 概説……………八二
 第二節 知覺……………八五

目次	四
第三節 思惟	九
第四節 感覺	九七
第九章 社會意識	一〇一
第十章 異常意識	一〇四
(附錄) 研究問題	(一)

目次終

本稿 心理學綱要

稻毛金七稿

第一篇 心理學とは何ぞ

第一章 心理學の定義

心理學は、心の學又は意識の學で、心又は意識の真相を明かにすることによつて、學問及び人生の進歩に貢獻することを目的乃至使命とするものである。

第二章 心理學の意義

第一節 心理學の語義

(一) 歐洲語。「心理學」といふ日本語は、歐洲語の翻譯である。そして、心理學の歐原語は、希臘語の *Psukhê* (心又は精神の義) と *Logos* (話・語又は理の義) との合成語たる羅典語 *Psychologia* である。英語では *Psychology* 佛語では *Psychologie* 獨語では *Psychologie* がこれに該當し、何れも「心の學」の義である。そして、*Psychologia* が成語となつたのは十六世紀末であり、これが一般に流布したのは十八世紀初である。

(二) 日本語。日本語の「心理學」は、蘭學者西周氏が、明治十一年に、英語の *Mental philosophy* を翻譯したものである。西氏は、明治七年に「*Psychology* 又は *Mental science* を「性理の學」と翻譯し、次いで同十年に

Psychology を「性理學」と譯し、更に翌十一年に、シカゴ大學教授ジョセフ・フ・ハットン著「*Mental philosophy*」(1856) を翻譯し、これを「奚般氏心理學」と命名し、且其の第一頁に、「メンタル・フキロソフキ、爰ニ心理學上ノ哲學ト翻譯シ、約メテ心理學ト譯ス」と註して、文部省から刊行したが、これこそ「心理學」といふ日本語の起源である。

第二節 心理學の本質

(一) 意義。心理學の本質は、心理學をして心理學たらしめる根本特質である。

(二) 本質。

(1) 心理學は學である。そして、學とは、合理的知識、即ち、一定の目的と方法とによつて組織された、明確にして而も永しへに發展する、目的的方法的、系統的、進歩的知識で、廣義の思想に屬し、實行又は實生活とも、非學的思想たる常識や私見や趣味や信念(仰)とも異なるものである。

(2) 心理學は、心の學又は意識の學である。心は身體と表裏する生命の一面で、廣義に識ること、即ち、知情意及び所謂無意識を含む(即ち自覺を根本特質とする點に於て、意識とも呼ばれ、隨つて心理學は、意識の學とも稱される)。

但し、心理學は、全體としての心又は意識を研究の對象とするが故に、科學及び哲學に屬すると共に、これらの諸分野と密接な關係を有する。

第三節 心理學の方法

(一) 意義。學が方法的知識である限り、心理學も亦獨自の方法を持たなくてはならない。

(二) 種類。心理學の方法には種々あるが、其の主要なものは、觀察法・實驗法・精神分析法・發達的方法等である。

(1) 觀察法。これは、意識の性質・状態乃至變化をあるがまゝに認識する方法で、左の二種に別れる。

(イ) 內的觀察法又は内省法。これは、自己の意識を直接に認識する方法で、古來心理學の主要方法であり、且自己の意識の認識のみに限られる方法である。

(ロ) 外的觀察法。これは、他人の意識を間接に、即ち身體や物質の媒介を通して認識する方法で、主として動物心理學・廣義の兒童心理學・異常心理學等に用ひられる。

(2) 實驗法。實驗とは、現象の生起及び進行に對して觀察者の有意的干渉を加へた觀察であるといふヴントの定義の如く、任意的條件の下に、内外二つの觀察を行ふことである。随つて、實驗法は、觀察法と全く別なものではなくて、廣義の觀察法の一、殊に外的觀察法に近似するもので、其の特色は、任意的條件殊に特殊の機械や手段を用ひ、研究の目的を達成するまで同一に近い處置を反復するところに存する。

(3) 精神分析法。これは、病的心理の原因を發見すると共にこれを治癒する方法である。即ち、連續的發問や夢判斷等により次第に聯想の原則を辿り、過去殊に幼時に於て抑壓され、且爾後多年の間潜在意識中に抑壓されつつある欲望即ち複合を發見する方法で、主としてフロイドの提唱し且使用したものであり、随つて、其の適用は病的心理に限られる。

(4) 發達的方法。これは、全體として發達する意識の構造を分

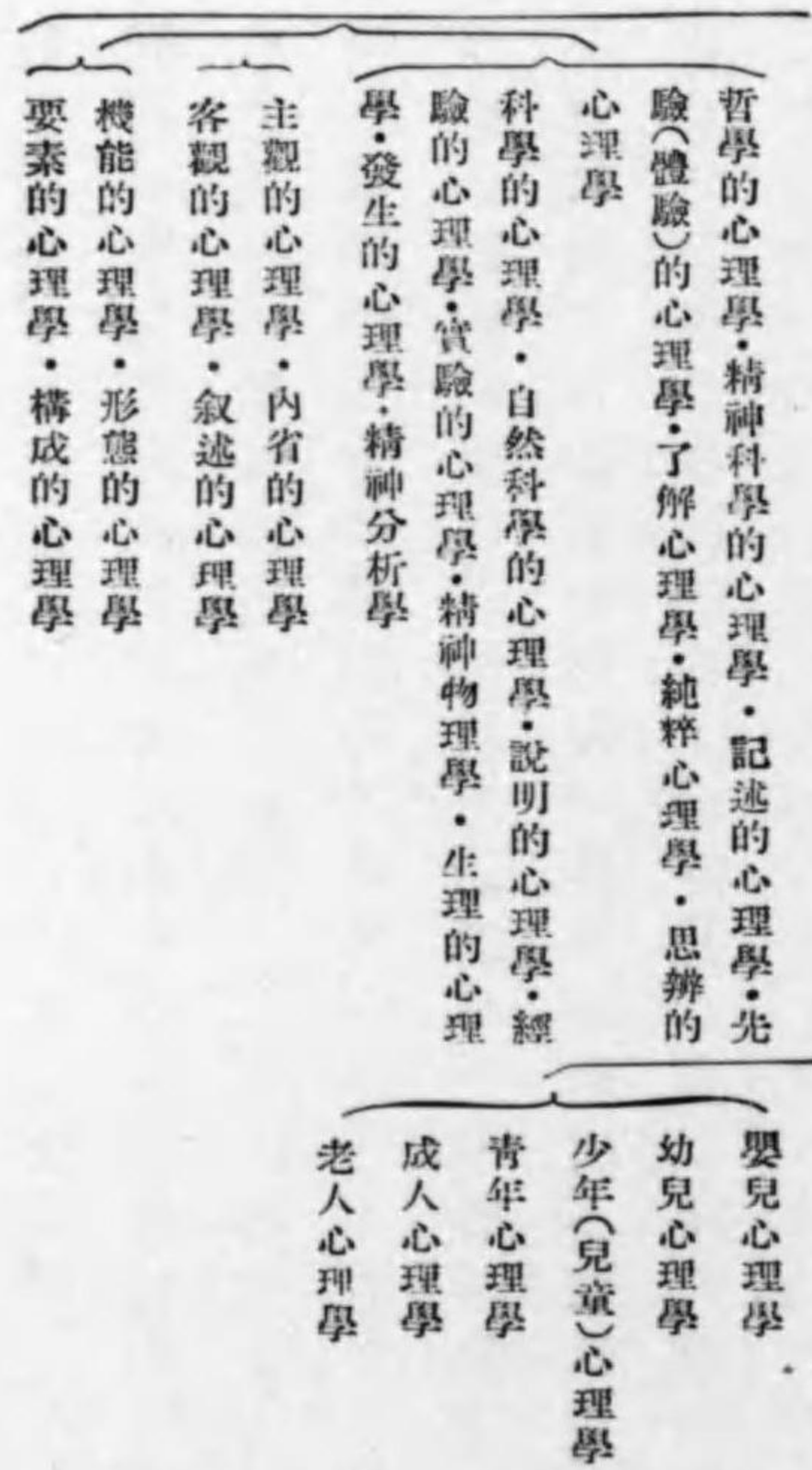
離させずに理解し、闡明する方法で、主として、動物心理學・兒童心理學及び民族心理學等、クリューガー等の所謂發達心理學に用ひられる。

第四節 心理學の體系

(一) 意義。學が系統的知識である限り、心理學も亦體系を具へなくてはならない。そして心理學の體系は、分類と組織とによつて構成されるのである。

(二) 體系。心理學の分類法には、大凡四種ある。立場よりの分類、目的よりの分類方法よりの分類及び對象よりの分類が、即ちこれである。

(1) 立場よりの分類は、研究者の立場の相違による分類であり、(2) 目的よりの分類は、研究者の目的の相違による分類であり、(3) 方法よりの分類は、研究法の相違による分類であり、(4) 對象よりの分類は、研究の對象の相違による分類である。そしてこれらの諸分類の結果を組織すれば、左の如き體系となるのである。



第三章 心理學の價值

(一) 序。凡そ學問が合理的知識であるかぎり、これを有効に學習せんがためには、其の價值又は效果に對して明白な理解と鞏固な信念とを持たなくてはならない。況んや、心理學のやうに、高等學校や専門學校に於て始めて課されると共に必修科となつてゐる學問に於てをや。

(二) 心理學の價值及び其の二面。心理學の價值は、心理學の學問全體及び人生全體に於ける地位及びそれらに對する使命で、理論的價值及び實際的價值に別れる。

(1) 心理學の理論的價值。これは、心理學の學問全體に於ける地位及びそれに對する使命である。別言すれば、心理學の學問としての資格の完否大小學問體系上の地位の高下、其の他の學問に依存する程度の如何及び全體並に部分としての學問の成立乃至

進歩に對する貢獻の如何である。

そして、心理學は、獨立學であると共に、廣義の基礎學であり、隨つて、學問としての資格を具備し、學問に於ける地位も高く、それに対する使命も重く、その成立乃至進歩に貢獻する所も大であり、おのづから、高等専門の學術を研究するには必ずこれを學ばねばならないところに、其の理論的價值がある。

(2) 心理學の實際的價值。心理學の實際的價值は、心理學の學問以外の人生に於ける地位及びそれに対する使命である。別言すれば、心理學を學んだものが、學問以外の實生活を營む上に享受する効益、又は、學問以外の實生活に對する心理學の寄與貢獻である。そして、實生活も、其の本質が心的なものであるかぎり、心理學の實際的價值は、かなりに高大で、正に實生活の一指針であるといはなくてはならない。道德・宗教・藝術・教育・政治・經濟・法律・産業等の重要問題から、言語・風習・飲食・起居・趣味・娛樂・勤勞等の日常生活及び

犯罪・病氣・療養・天才・群衆・戰爭等の異常現象に至るまで、一として心理學に没交渉なものがない。以下これら廣汎な心理學の實際的價値中、特に政治生活・經濟生活・商業生活・法律生活及び藝術生活から見た心理學の實際的價値を略叙することとする。

(イ) 政治は、俗に活きものといはれてゐる如く、複雑な社會心理的現象であるが故に、心理學上の知識なくしては、其の活用は勿論、其の理解さへも不可能である。事實、民心の向背や、政機の動向や、反對黨の策謀等を洞察するにも、選舉の對策や議會の驅引等を有效ならしめるにも、心理學が必要である。

(ロ) 經濟も亦一個の社會心理的現象であるかぎり、心理學が經濟生活上、有價値であることは、贅言を要しない。そして、心理學が特に經濟生活と密接な關係を有する部分は、意志就中欲望及び感情就中快不快等の情緒であり、經濟生活中特に心理學的考察を要するのは、需要供給關係・物價の高低・恐慌・銀行取付等である。

(ハ) 心理學は商業生活から見ても價値がある。流行・店舗と場所との關係、廣告・宣傳・勸誘・飾窓・陳列・値段付等の仕方、顧客に對する商品の示し方等は、何れも心理學的知識を有するものによつてのみ正しく理解し有効に活用することが出来るからである。

(ニ) 心理學は、法律生活にも有價値である。法律現象も意的現象であり、隨つて法律生活に於て、意思が極めて重要な意義を有することを始めとし、或は刑の執行猶豫や恩赦・特赦等の如き、豫審と公判又は三審の別の如き、何れも人間の心理を基礎として立てられた制度であり、更に、犯罪・審理・捜査・供述・精神鑑定等も、等しく心理學に俟つところが大である。事實、古今東西の名判官は何れも卓越した心理學者であつたではないか。

(ホ) 心理學は藝術生活にも必要有價値である。藝術は、人心の幾微を如實に把握し、且有効に表現するものであり、隨つて心理學的知識を具へることなくしては、優れた藝術の創作も、正しい鑑賞

も不可能であることは、創作心理や批評的精神等の語の立證するところである。但し、藝術に最も必要有價値な心理學は、勿論感情的方面の研究である。

(三) 要約。以上、要するに、心理學は、心の本質を明かにすることにより、學問全體及び人生全體の進歩に貢獻し、あらゆる研究と實行とに寄與することを目的乃至使命とする一個の獨立學にして廣義の基礎學たるところに、其の價値が存するのである。

第四章 心理學の發達

(一) 序。學が進歩的知識であるかぎり、心理學の真相を明かにするには、其の生起及び發達の過程を検討しなくてはならない。

(二) 西洋に於ける心理學の發達。西洋に於ては、既に上古希臘のアリストテレース(Aristoteles, 384-322, B.C.)によつて心理學の基礎を据ゑられたが、それが命名されたのは、前述の如く、漸く十六世紀末のことであり、而も心理學が一通の學問的資格を具へたのは、獨逸のヘルバルト(Herbart, 1776-1841)の『學としての心理學』(一八二四—五年)によつてであり、其の大成を見たのは、主として二十世紀初頭に於ける獨逸のヴント(Wundt, 1832-1920)の努力の結果である。

心理學の發達に貢獻した國は、希臘に次いで、英・佛・獨・米・伊・丁・和・露・日等であり、而も、嚴密な意味の心理學は、近世の產物であると共に、近世心理學國の代表は、英・佛・獨・米であり、そして、今日最も旺ん

な國は、獨米兩國である。

(1) 英吉利は、希臘羅馬に次いで心理學の發達に最も早く貢獻したが、今日では米獨に一步遅れてゐる。そして、英吉利心理學の主要特色は、科學的で、理知の研究を主とし、且經驗を重んじ、隨つて歸納法を主とする所に存する。

(2) 佛蘭西は、大陸に於ける心理學の先驅であるが、而も獨米は勿論、英吉利に比しても幾分不振である。そして佛蘭西心理學の主要特色は、特に感情、社會心理、異常心理等を重視し、且數量的、實驗的研究と直觀的、藝術的研究とを併用する所に存する。

(3) 獨逸の心理學は、英佛兩國に一步遅れて發足しながら、而も克く兩國を凌駕して、歐洲、否世界の心理學の牛耳を執りつつある。そして獨逸心理學の主要特色は、全一としての意識を對象としながら、而も其の精髓を意的なものを見ると共に、其の研究法もあらゆる方法を活用し、且民族的方面や應用的方面にも十分な注意を

拂ふ所に存する。

(4) 米國の心理學は、近世の代表的心理學國中最も後れて發達したにも係らず、今日に於ては、獨逸と相對峙し相補合して世界心理學の双壁たる地位を占めてゐる。そして米國心理學の主要特色は、略英國のそれと類似するが、特に應用方面に力を注ぎ、隨つて教育的心理學、職業的心理學等の進歩が顯著な所に、其の英國心理學と異なる獨自性が存する。

(三) 日本に於ける心理學の發達。日本にも、廣義の心理學は存在したが、明治維新後西洋の心理學が輸入されるまでは其の十分な發達を見ることが出来なかつた。そして、今日までの發達の段階は略五期に別つことが出来る。

(1) 第一期は、略明治十年より三十年までで、英米獨心理學輸入時代であり、(2) 第二期は、略明治三十年より四十年までで、獨立時代であり、(3) 第三期は、略大正前期に當る應用普及時代であり、(4) 第四期

は、略大正後期より昭和初までで、哲學的心理學の時代であり、(5)第五期は、現今で、日本心理學創建の時代である。そして、この前後六十年の間に於て、心理學の發達に最も多く貢獻したものは、松本亦太郎氏である。

第二篇 意識論

第一章 意識

第一節 意識の本質

(一) 序。意識(Consciousness)には種々の意義があるが、人間及び動物が共有すると共に、人間に於て最も發達し、且其の精髓を形造るのが意識であると解することが、一番穩當である。

(二) 意識の本質。意識の本質、即ち、意識の意識たる所以は、自覺性又は自己超越性、精しくは、自分で自分を識ると共に、自分で發展する所に存する。

意識は、自分で自分を識るものであるが、自分を識ることに、直接に自分を識ることと、自分以外のものを識ることを通して間接

に自分を識ることとを含み、且自分を識ることより他を識ることが概して困難である。而も自分を識ることに明暗の差があり、時には全く自分を識らないと思はれることもないではない。例へば、所謂無意識・潜在意識・副意識や幼時の意識や過度に興奮した時の意識等がそれであるが、而もこれらの場合にも幾分か自分を自分で識つてゐるのである。

意識は、更に、自分で發展するものであるが故に、發動的・自律的であると共に異質流續的であり、随つて、其の受動的・他律的な状態は、幼稚な状態か不健全な状態であり、且意識は、一瞬時も止ることがなく、又一刹那前にも逆戻することが出来ず、おのづから一部分だけを切り離すことも出来ないのである。

(三) 人間の意識と動物の意識。人間の意識と動物の意識とは、量的にも質的にも異なる。そして兩者の質的差異は、要するに、嚴密な意味の自覺性の有無である。即ち、人間の意識は、價值的及び存

在的の二面を包括する全き意味の自覺性を具へてゐるが、動物の意識は、單に存在的自覺性をしか具へてゐない。理想・義務・評價・自律・反省・自己否定・自己超越・創造等が人間の特性であり、道徳を始め文化が人生にのみ存在し、十分な教育が人間にのみ可能であり、随つて、人間の意識が特に精神と呼ばれるのも、これがためである。

(四) 意識の構造(分野)。意識は、一部分だけを切り離すことの出來ない點に於て、構造體であるが故に、これには諸多の分野がある。潜在的方面と顯在的方面・作用的方面と對象的方面と内容的方面・主觀的方面と客觀的方面・發動的方面と受動的方面・先天的方面と後天的方面・高い方面と低い方面・個人的方面と社會的方面・正常的方面と異常的方面・意的方面と情的方面と知的方面等が、即ちこれである。

第二節 意識と身體

(一) 序。意識は前述の如く、身體と表裏する生命の一面であるが故に、意識の真相を明かにするには、それと身體との關係を檢討しなくてはならない。然るに、意識と身體との關係觀又は所謂心身關係論には、唯心論、唯物論、並行論、相制論等種々あるが、何れも不完全で、主心的、相制的、並行論が最も妥當である。

(二) 意識と身體との關係。(1) 主心的、相制的、並行論。これに従へば、意識と身體とは、生命の表裏的、二面で、意識のある所に身體があり、身體のある所に意識がある(並行論)が、而も兩者は、二本のレールのやうに、只冷やかに相並んでゐるだけでなくて、相互に影響し、制約し、因果し、合ふ(相制論)と共に、生命が健全である場合には意識が身體を制約する度合が高く、且生命が發達するに従つて其の度合が益々高くなり、そして其の反對も正しいばかりでなく、更に

心理學は心(意識)の卓越性を根本假定とするものであるが故に、意識と身體との關係を明かにするのが心(意識)でなくてはならない(主心論)。

(2) 意識と身體との相制關係。意識と身體との關係に於て最も主要なのは、相制關係即ち意識の身體に及ぼす影響と身體の意識に及ぼす影響とである。

(イ) 意識の身體に及ぼす影響。意識は必ず身體に何等かの影響を及ぼすが、而も感情及び意志が、理知よりも一層強大であり、且感情が最も迅速強烈である。

(ロ) 身體の意識に及ぼす影響。意識が身體から制約されることは、健全なる精神は健全なる身體に宿るといふ諺を始め、意識が腦髓等の特別な生理器官を要し、随つて、生理器官の單複がやがて意識の高下であること等によつても明かである。而も、直接且多大な身體的影響を受けるものは、理知であり、感情と意志とはこれ

に次ぐのである。

(三) 神経系統。人間及び動物の身體中意識と最も密接な關係を有するものは、神経系統であるが故に、意識と身體との關係を明かにするには、必ず神経系統について一通の説明を試みなくてはならない。

神経系統は、神経物質即ちノイロンといふ原體によつて構成され、且身體各部に分布されたものである。そしてノイロンは、一個の細胞と軸索突起及び樹枝狀突起と稱する二個の突起即ち纖維とより成り、而も機能的には一對が單位を形造つてゐる。

神経系統には、高等動物の神経系統と下等動物の神経系統との別がある。前者は、腦髓といふ特殊の器官を中心とするのに對し、後者は、腦髓が未だ分離せず、只脊髓系神経のみを器官とするものである。

高等動物の神経系統は其の部位及び機能の差により、中樞神經

系統と末梢神経系統とに大別される。中樞神経系統は、腦神經及び脊髓神經の總稱であり、末梢神経系統は、中樞と身體の末梢部とを連絡する神経の總稱である。尙、腦には、大脳・小脳・延髓等の別があるが、勿論、大脳が最も重要である。

大脳は、神経系統中最も複雑な部位であるが、就中大脳皮質が最も重要で、高等な精神作用の中樞を占め、この部分の發達がやがて意識の高下である。尙、成人の大脳の重量は、約千三四百瓦であるが、出生當時既に其の約四分の一以上を有してゐる。

第二章 人格

(一) 意義。人格(Personality)は、自我意識によつて統一された意識の具象體である。

(二) 分野。人格には種々の分野があるが、先づこれを形式的方面と實質的方面とに分つことが出来る。前者は、統一者としての自我であり後者は、被統一者としての意識内容即ち廣義の個性である。そして自我にも個性にも尙種々の分野があるが、これらは後章に譲り、茲には單に人格の統一性のみについて略述することとする。

(三) 人格の統一性。人格が統一體だといふことは、個體であると共に、動的內在的統一體だといふことである。人格が統一體であるかぎり、個體であることはいふまでもない。只人格は、靜的なもの即ち固定的なものでなくて、不斷に變化しながら而も常に同一性を保つところに、其の特色が存する。そして、人格の統一性が同一性だといふことは、やがて人格の統一性の原動力が人格其のものの中に在るといふこと、即ち、人格が內在的統一體だといふことを意味する。

然らば、人格をして斯くの如き統一性を保たしめるものは何か。勿論、それは自我意識である。然るに、世には、人格の統一性の原動力を、偏に理知殊に記憶のみに限るものもないではないが、これは偏見である。人格の統一性は現在のなものであるのに、記憶は單に過去の我と現在の我とを統一するだけであり、そして現在の我と將來の我との統一も、現在の私の自覺も、多分に情意的であるばかりでなく、記憶にすらも獨特な感情が纏綿してをり、更に、知的統一は情意的統一よりも薄弱にして膚淺だからである。

事實、意識中最も強大にして永續的な統一力を有するものは意志である。意志は、單に自己其のものを統一するばかりでなく、矛

盾しがちな理知と感情とを統一し、更に、あらゆる障礙を排して人格の統一を保持し、益々これを強めて行くものだからである。これに次ぐものは感情であり、且感情に依る統一、即ち、氣分・情調・趣味・信念・信仰等は、人格の統一の基調を形造り、且其の統一性は強いが一時的である。

(四) 人格の障礙。人格は、其の統一性が損傷される時には病的状態となる。人格の障礙が即ちこれである。そして人格の障礙には、分裂と分裂以外の障礙とがある。人格の分裂は、所謂二重人格であり、分裂以外の障礙には、人格消失・人格異様觀・自己幻視等の別がある。

第三章 自我

(一) 意義。自我(Self)は、我といふ自覺、即ち、意識の具象體たる人格の統一者又は形式的・主觀的方面で、個性と對蹠的關係を有するものである。

(二) 種類。自我には種々あるが、沒價値的と價値的・非精神的(身物的)と精神的(知的・情的・意的)・現實的と理想的・個別的と普遍的・家族的・社會的・國家的等が、其の代表的區別である。

(三) 自我意識の成立及び發達。自我意識は、發達的であるが其の成立發達は、大凡三段を經過する。即ち、(1)自我意識は非我(他我を含む)意識に即して成立し、(2)次には、非我意識と對立又は抗争して存在發達し、(3)最後には、非我意識と協調し又はこれを包括して存在發達するものである。そして、最も廣い意味で自我意識が成立するのは、ポールドヴィンに依れば、生後二箇月で、暗黒中に母又は

乳母を抱擁の工合等によつて辨別するのが、それである。

尙、他面より見れば、自我意識は、没價値的より價値的に、非精神的より精神的に、現實的より理想的に、個別的より普遍的に、發達して行くのである。

そして、斯くの如き自我意識の成立發達の實際的順序又は主要機縁は、自己の身體容姿衣服羞恥感言語所有觀念道德的意識等である。

第四章 個性

第一節 概説

(一) 意義。個性 (Individuality) は、人格の實質的客觀的方面、即ち一個の人格をして他から區別せしめる先天的並に後天的特性即ち素質と經驗とで、自我と對蹠的關係を有すると共に、性格、氣質、知能を三大分野とする。但し、時には、類型を個性と見る場合もある。

(二) 個性研究。個性の心理學的研究は極めて最近のことに屬し、主として實用的動機即ち教育や職業の必要から生起したもので、個性特に個的類型の研究を主眼とする個性心理學又は差異心理學が其の代表である。

尙、一般には、個性調査と呼ばれてゐるが、この場合の個性には多義があつて必ずしも上記嚴密な意味の個性とは限らないから、寧

ろ適性検査、知能検査等と呼んだ方がよい。そして嚴密な意味の個性を研究するには、存在的方面と價值的方面、先天的的と後天的方面、意的方面と情的方面と知的方面等を包括しなくてはならない。

個性の研究法は、勿論、實驗法を主とするが、特に所謂テストが重視される。そしてテストには、一般的検査法と特殊の検査法、直接的検査法と間接的検査法、個別的検査法と集團的検査法、口答法と筆答法、年齢別法と性別法等、諸多の區別がある。

(三) 類型。類型は、廣義の個性、即ち、或る類に共通する特性の義で、サラリーマンタイプ、モダンボーイ型、勤人根性、職人かたぎ等を始め、觀念型、記憶型、生形式、スエブランガの用語で、理論型、經濟型、審美型、社會型、勢力型、宗教型に別れる等が、即ちこれである。

第二節 性格

(一) 意義。性格 (Character) は、意志の先天的並に後天的特性で、個性の意的方面を形造るものである。

但し、性格には種々の見方がある。最も廣いのは性格學の見解で、性格を殆ど意識、人格又は個性と同様に解し、狭いのは、品性や男女の相性等と同一視するものであるが、最も妥當な見解は、性格を個性の一部であると共に、品性よりも幾分廣く且一層先天的なものとする見解である。尙、性格の個性に於ける地位は次第に高まりつつある。

(二) 種類。性格は、形式上、正常的性格と異常的性格(變質者)、強い性格と弱い性格、固定的性格と變化的性格、融和型と非融和型等に別れ、實質上、善性格と惡性格、勉強家と怠惰者、正直者と嘘つき、眞面目な人間と不眞面目な人間、男性的な人間と女性的な人間等に別

れる。

尙個性を廣義に解する時には、性格も亦廣義に解され、國民的性格、民族的性格等の如くに用ひられる。意志の部分的、後天的傾向は習性又は習慣で、其中、異常又は有害なもの即ち酒癖、盜癖等は性癖と呼ばれる。

第三節 氣質

(一) 意義。氣質(Temperament)は、感情的素質又は感情の先天性で、個性の情的方面を形造ると共に、主として感情活動の強弱遲速からの考察である。

氣質は、先天的であるが故に永續的ではあるが、而も年齢に準じて幾分變化すると共に、各人は數氣質を混有し、且地方民や國民や男女の間にも、氣質の差が存するのである。

(二) 種類。氣質には、多血質、膽汁質、神經(憂鬱)質、粘液質の別がある。

氣質は、古代希臘の學者ヒポクラテス(Hippocrates, 460-377B.C.)が人體内の液體の別に準じて上記の如く區分したものをヴェントが繼承し、且これを主として感情活動の強弱遲速による分類とした。尙、血液型の相違から氣質を區分するものもある。

(1) 多血質。これは感情活動が速くて弱い氣質で、快的感情強く、快活で、社交的で、樂天的であるけれども、忍耐力乏しく、輕佻浮薄で、我儘で、むら氣で、感じ易く、激し易く、心移り易く、現在の刺戟に容易く動かされ易い。いはば陽氣で、商人や接客業者等に適し、且女子及び幼少年期に最も多い氣質である。

(2) 胆汁質。これは感情活動が速くて強い氣質で、不快に傾き、且激怒し易く、意地が悪いが、意志強く、勇往果斷の氣象に富み、舉動活潑、精氣充實し、目前の事象を能く處理する。いはば剛氣で、實務家や政治家や軍人等、即ち有能な活動家に最も多く、且壯年期に該當する氣質である。

(3) 神經質又は憂鬱質。これは感情活動が遅くて強い氣質で、主觀的に感ずることが強く、且長く同一感情に支配され、随つて、行動を外面に現すよりは内觀的、瞑想的で、孤獨を樂しみ、集團生活を好まず、自ら主我的であり、且憂鬱にして悲觀的であると共に、將來

的理想の乃至空想的であるのを常とする。而も觀察が緻密で、智力に秀でてゐるから、古來天才殊に藝術的天才にしてこの氣質を有するものが多い。いはば陰氣で、青年は概してこの氣質の所有者である。

(4) 粘液質。これは感情活動が遅くて弱い氣質で、快の感情に傾くが、活氣熱心に乏しく、舉動が緩慢である。即ち、心情が冷靜で、主として將來に對する關心を有し、事に當つて動せず、且辛抱強く、一度定めた目的は必ず達成しようとするのが特色であり、随つてこの氣質の所有者は、平氣で、利己主義者、冷淡家、頑固者、平然たる實行家になり易く、且老年期及び女子に最も多く見られる氣質である。

第四節 知能

(一) 意義。知能(Intelligence)は、知的素質又は理知の先天性で、個性の知的方面を形造るものである。但し、時には、稍高等な知的性能、即ち思惟力、判斷力、理解力、適應性等と見られることもあると共に、團體的即ち民族的又は民族的等にも解されることがある。

(二) 知能の遺傳性。知能は、經驗に俟つことも少くないが、大體に於て遺傳的である。そして、知能の遺傳に對する男女(父母等)の地位は略同等であるが、知能卓越者の生母には賢母が多いと共に、其の出産年齢は三十歳以前が最も多いのに對し、父には老年者が少くない。而も同一の両親から生れた兄弟姉妹甚だしきは雙兒の間にも、知能の相違があり、且第一子には、比較的両親又は祖父母の缺點が遺傳し易くて溫和であるが、時としては異常に卓越した偉材が現れることがあり、第二子に偉人が最も多く、第三子はこれ

に次ぎ、末子又これに次ぎ、獨子は最後に位する。

遺傳性の最も多、のは音楽で、これに次ぐのは繪畫である。そして、遺傳性の發動出現に於ても、リポに從へば、音楽が最も早く、繪畫・文學・學問等がこれに次ぎ、而も大凡三歳から七歳までの間に其の發動が開始されるのである。

(三) 知能指數。知能の優劣を決定するには一定の標準又は尺度がなくてはならない。これが知能指數又は知能商(Intelligence Quotient=I.Q.)である。これは、ビネー・シモン検査法によつて検査した兒童の知能の程度を示す數字、即ち心年齢を暦年齢で除した商、 $\frac{\text{心年齢}}{\text{暦年齢}} \times 100$ の算式で表すことが出来るものである。そして普通兒は1又は100%、これ以上は優等兒、これ以下は劣等兒である。

これを詳言するに、知能の優劣は、年齢に關係はあるが、必ずしも普通の年齢即ち暦(生存)年齢と平行するものではないので、別に心年齢なるものによつて、知能の發達程度を測定するのである。心

年齢とは、意識(主に知能)の程度を年齢といふ單位で現した一種の評價數値である。例へば、曆年齢八歳二箇月の兒童が、八歳級の精神検査問題に全部合格し、且九歳級の四問題中二問題に合格し、十歳級の四問題中一問題に合格し、十一歳級の四問題が全部不合格であつたとすれば、この兒童の心年齢は $8 + \frac{2}{4} + \frac{1}{4} = 8\frac{3}{4}$ 即ち八歳九箇月であり、そして其の知能指數は $\frac{8\frac{3}{4} \times 2}{2} \times 100 = 107$ である。

尙、知能検査法の案出者ビネーの方法を修正して今日模範的検査法と見られてゐる、米國のスタンフォード式知能検査法の結果から定められた知能の段階は、左の如くである。

- | | |
|--------------------|-------------------|
| (一) 天才 知能指數 一四〇以上 | (五) 劣等 知能指數 八〇—九〇 |
| (二) 最上知同 上 一二〇—一四〇 | (六) 低能同 上 七〇—八〇 |
| (三) 上知同 上 一一〇—一二〇 | (七) 精神薄弱同 上 二五—七〇 |
| (四) 平均知同 上 九〇—一二〇 | (八) 白痴同 上 二五以下 |

第五章 注意

(一) 意義。注意(Attention)は、対象を明かに認識せんがために、特に意識を認識せんとする対象に向つて集注する作用である。

(二) 方面。注意が、対象を明かに認識しようとするのは、其の目的であると共に客觀的方面であり、特に意識を対象に向つて集注するのは、其の手段であると共に主觀的方面である。

(1) 集注作用。これは、緊張と抑制とを兩面とする選擇作用で、多數あり得る対象中唯一つのみを選び、其の他の対象を抑制する作用である。そして後者に該當するものは不注意である。随つて、不注意は、注意の消極的一特質又は一條件即ち他注意であるが故に、一概に排斥すべきではない。排斥すべきは、文字通の不注意即ち無注意又は注意散漫や放心等である。

(2) 明識作用。これは、或る対象を識野の中心に持ち來すこと

によつて可能である。そして集注が強くなればなる程明識の範圍は狭少となるのである。

尙、識野は、或一瞬間に於ける顯在意識の全範圍、即ち注意が起伏して動搖する中の一波によつて繼續的な刺戟を識得する最大な限度で、其の中心は極めて明瞭であり、周圍に至るに従つて次第に不明瞭となると共に、其の範圍は絶えず變化するものである。

(三) 價值。注意は、全體としての意識に於て相當重要な地位を占めるものである。注意は、先づ意志決定に與つて力がある。即ち、或動機に注意する時にはそれが優勢となつて他の諸動機を征服するのである。そして反對の動機がなければ、注意は直ちに動作を支配するのである。次に、注意は理知作用を助長する。穎才と鈍才との別は注意力の強弱にあるとさへいふことが出来る。そしてこれは殊に記憶に於てさうである。即ち、注意は記憶を明確にする重大な條件である。

(四) 條件。以上の略叙からも察知し得るやうに、注意には、主觀的及び客觀的の二條件が必要である。

(1) 客觀的條件。これは、要するに刺戟であるが、更に(イ)刺戟の分量(即ち刺戟の大小、長短で、大きな看板や長い音は注意を惹起し易い。但し、過度に大きなものは必ずしもさうではない。)(ロ)刺戟の強度(刺戟の強弱で、高い音や輝く色等が注意を惹き易い。但し、過度に強い刺戟は一時的の注意を惹くだけで、永續はしない。)(ハ)刺戟の變化(刺戟が強大でも變化がなければ注意を惹かない。例へば、時計の音が長く續けば氣がつかず、却つて停止した際に氣がつき、廻轉式明滅式の電氣廣告が特に注意を惹くが如き即ちこれである。屢々繰り返されるものが注意を惹くのも同一理である。)(ニ)刺戟の新古又は緩急(見慣れ聞き慣れないものが特に注意を惹くのである。)(ホ)意識に現れる時間的順序(の先なもの、後ものが特に注意を惹く。)(ヘ)刺戟の對比などに別つことが出来る。

(2) **主觀的條件。**これは意識の性質又は状態で、注意者の先天性過去の経験及び現在の心狀を包含し、(イ)先天的條件(即ち神經組織の遺傳的特質の相違で、例へば、音樂的素質に富むものは聽覺的注意が鋭いといふ如き)、(ロ)刺戟と合致する表象の有無例へば待ち設けた家人の足音が特に注意を惹く如き)、(ハ)感興が伴ふか否か(學者が自己の専門のことに特に注意し、美裝せる婦人が他の婦人の服裝に特に注意する如き)、(ニ)責任感・將來の利害・快苦の豫想(ホ)趣味嗜好に適するか否か等の諸條件を包含する。

(五) **種類。**注意は、有意注意と無意注意と反意注意・感覺的注意と觀念的注意・直接的注意と間接的注意等に分つことが出来る。

第六章 意志

第一節 概説

(一) **意義。**意志(Wille)は意識の中核で、發動性と目的達成性とを本質とし、感情と理知とを内容とし、動機に始まり行動に終ることを一段とするものである。

(二) **本質。**意志の本質は、前述の如く、發動性及び目的達成性である。發動性は意志の形式的本質であり、目的達成性は其の實質的本質である。

(1) **發動性。**理知が受動的であり、感情が反動的であるのに對し、意志は發動的である。そして、意志の發動性は、自律性・努力性・客觀化性・發展性の四義を包含する。

(イ) **自律性。**これは、意志は其の動力を自己の内に本具し、自己

の力で自己を律すると共に、常に最善のものを選ぶといふことである。そして茲に意志が意識の中核を形造る所以が存する。

(ロ) 努力性。これは、目的を自ら設定し、手段を自ら工夫するばかりでなく、一旦設定した目的を達成するまでは、如何なる困難とも戦ふといふことである。意志活動に必ずグントの所謂「努力感」抵抗感又は緊張感が伴ふのも、これがためである。

(ハ) 客観化性。これは、自己を外部に現し、他に働きかけるといふことである。意志が、身體を動かして、即ち行動となつて始めて一段落つくのもこのために他ならない。

(ニ) 發展性。これは、意志活動は、一段落つけば一層高大な目的を設定し且これが達成を期圖することによつて、意志自身は勿論、意識全體を發展させるといふことである。

(2) 目的達成性。これは、意志の實質的本質であるが故に、意志の發動性以外の特質ではなくて、其の内容に他ならない。即ち、意

志は、動機に始つて其の充足に終ることを一段とするものであり、随つて、高義の意志は、動機の争又は目的觀念及び手段觀念を不可缺の條件とするものである。

(三) 意志と感情及び理知。意志は働きであるが故に内容を要する。そして感情と理知とが意志の内容を形造るが、而も意志は、感情と理知とを統一するものであるが故に、意志と感情及び理知との關係は相關的である。

(四) 種類。意志は、其の單複の差によつて單純意志と複雑意志とに別れ、其の場所の差によつて内部意志と外部意志とに別れ、其の形態の差によつて積極意志と消極意志とに別れる。

(1) 單純意志は、其の動機が單一で思慮選擇の必要がないもの、即ち一動機・一行動的意志で、衝動及び本能がこれに屬する。(2) 複雑意志は、其の動機が複雑で思慮選擇が必要なもので、執意又は意思及び有意作用がこれに屬する。

(3) 内部意志は、未だ行動とならない意志であり、(4) 外部意志は、行動となつた意志である。尙、行動の代表的なものは作業である。

(5) 積極意志は爲す意志であり、(6) 消極意志は爲さざる意志である。

(五) 發達。意志は自然の儘でも或る程度まで發達するが、修養鍛錬も必要である。そして其の何れに於ても、感情及び理知の發達を一必須條件とし、肉體の發達とも關係がある。

意志發達の様式に二種ある。單純より複雑に進む前進的發達と、複雑より單純に向ふ背進的發達即ち習慣化とが、即ちこれである。そして、意志が一通り成熟するのは、漸く青年期に於てである。

第二節 複雑意志—執意(意思)

(一) 意義。執意(Volition)は、意志の典型たる複雑意志、即ち意志の特質を完具した最も具象的にして且最も發達した意志で、又意思とも呼ばれる。詳しくは、例へば、休日に勉強せんがために圖書館に行く行動の如く、何等か目的を達せんとする二つ以上の動機が様々な形で意識中に相争ひ、意識が其の何れに従はんかを思慮した結果、唯一つを選択し、且これを實現せんとする作用で、努力感及び決定感(決定又は安固の情)を伴ふものである。但し、多動機が争なくして一動機に従ふ時には、有意作用(Voluntary action)とも呼ばれる。

(二) 過程。この意味の執意は、目的觀念及び手段觀念の成立、欲望の發動、思慮、選擇、決意、行動の過程を以て、一段とするものである。この過程中、決意までが内部意志であり、行動が外部意志であり、且

所謂努力感の最も強いのは、思慮・選擇及び行動の過程である。但し、意志は、本來積極的にして行動を伴ふものであるが、時には所謂爲さざる意志の如く、消極的にして行動を伴はぬものもある。決意にも種々の區別がある。

第三節 單純意志—衝動及び本能

第一項 序 說

(一) 意義。單純意志は、唯一の動機によつて直ちに行動を生起する單純又は幼稚な意志、即ち、目的及び手段に關する自覺を缺くか又は其の自覺が不明なもので、衝動及び本能の總稱である。

(二) 衝動と本能。衝動と本能とは、單純意志たる點に於ては、揆を一にするが、左の諸點に於て其の趣を異にする。即ち、(イ)衝動は、先天的にして後天的であるのに對し、本能は、先天的であり、隨つて(ロ)衝動は、本能よりも範圍が廣く、單に幼稚な意識であるだけではなくて、發達した意識中にも作用する點に於て、文字通の單純意志であるのに對し、本能は、一面的に形成された衝動であるといふヴントの語の如く、本來衝動的であり、且其の範圍が衝動よりも狭いと共に、意識の幼稚な際に多く、それが發達に順じて減少したり變

化したりする點に於て、單純にして且幼稚な意志であり、更に、(一)衝動は刺戟と行動との連絡が必ずしも一定してゐないのに對し、本能は、先天的に一定してゐる。

第二項 衝動

(一) 意義。衝動 (impulse) は、感覺及び知覺の刺戟を受けると、直ちに、且殆ど何等の思慮なしに、これに反應して行動するもので、單純意思の一種である。例へば、渴する幼兒が母乳を見るや思はず手を出したり、或は、兒童が飛行機の音を聞いて直ちに戶外に飛び出したりするが如きで、小兒や未開人の行動は、大抵この衝動に基づくのである。

衝動は、一動機的であり低意識的である點に於て、複雑意志と異ると共に、意識的な點に於て、反射運動と別である。

(二) 種類。衝動は、其の原因によつて感覺的衝動と知覺的衝動とに別れる。大音を聞いて飛び上るが如きは前者であり、母乳を見て手を出す如きは後者である。

第三項 本能

(一) 意義。本能 (Instinct) は、練習や経験にもよらず、又目的や結果をも豫知することなく、而も能く目的に適合する行動を、刺戟に對して反應し得る、先天的遺傳的にして、且同種の全個體に共通する性能で、單純意志の一種である。例へば、嬰兒が生後直ちに母乳を吸つたり、鳥が生後直ちに餌を啄んだり、蜜蜂が蜜を貯へたりするが如きである。

(二) 特質。本能には左の五特質がある。

(1) 定期性。これは、各本能にはそれぞれ發動にふさはしい一定の時期があるといふことである。凡そ本能は先天的遺傳的のものであるが、而も必ずしも凡ての本能が出生と同時に發動するのではなくて、心身の發達につれ、それにふさはしい本能が發動するのである。吸乳や號叫の如きは最も早く發動し、性的本能や保育本能の如きは比較的遅く發動する。尙、出生と同時に發動する

本能を同生本能と呼び、然らざるものを遲發本能と呼ぶのである。

(2) 一時性。これは、各本能は、其の發動期に於て必要な刺戟を缺く時には、終生發動しないでしまふか、又は間もなく衰消してしまふといふことである。例へば、鶏の雛が生後四日以内に動く物體(通例親雞の後を追ふ本能を現すものであるが、若しこの期間に眼を隠して置く時には、其の後動くものを見てもこれを追ふ本能を現すことがなく、却つて逃げ去らうとするが如き、或は、幼兒が言語本能發動期たる生後滿一箇年乃至三箇年の間に耳疾を患ふ時には、談話力が非常に劣るが如きである。

(3) 週期性。これは、本能が發動し終ると即ち行動となると、一度は消滅するが、一定の期間が過ぎると復發動すること、食慾性慾産卵睡眠冬眠移住等に顯著な特性である。

(4) 變化性。これは、先天的遺傳的な本能が、經驗——修養や教育の結果、高等な意識状態に變化すること、例へば、肉體的愛情が精

神的愛情に變化し、漂浪本能が探險慾に變化するが如きである。

(5) 早期特化性。これは、人生の初期の經驗に對して本能が強く結びつくことで、例へば、恐怖の本能は何人にも早くから發動するが、何を恐怖するかについては、初期の經驗との關係が重要性を帯びるといふことである。

尙、以上の特質に因んで一言すべきは、人間の本能は、先天的であるが、而も其の内容は後天的即ち習慣との結合である點に於て、比較的固定的な動物の本能と異り、其の種類も動物の本能よりは多いといふことである。

(三) 種類。數多い本能を、先づ發達的本能、自己保存の本能、種族保存の本能、社會的本能に四大別する。

(1) 發達の本能は、心身發達の動力基礎となるもので、更に、(イ)創造本能、(ロ)遊戯本能、(ハ)模倣本能、(ニ)順應本能等に別つことが出来る。

(2) 自己保存の本能は、各個人が自己の保存及び發達を圖るこ

とを目的とする本能で、更に、(イ)榮養本能、(ロ)所有本能、(ハ)防護本能、(ニ)攻撃本能に別つことが出来る。

(3) 種族保存の本能は、各個人が自己の種族の保存及び發達を圖ることを目的とする本能で、更に、(イ)生殖本能、(ロ)保育本能、(ハ)營巢構居本能に別つことが出来る。

(4) 社會的本能は、自己の所屬する社會が健全に發達することを目的とする本能で、(イ)群居本能、(ロ)共働本能、(ハ)愛他本能、(ニ)從屬本能又は自卑本能、(ホ)征服本能又は誇示本能に別つことが出来る。

尙、以上の諸本能中、自己保存の本能が、最も多數であり、有力であり、且早發的である。

第七章 感情

第一節 概説

(一) 意義。感情(Feeling)は意識の一根源で、其の主観的作用的方面を形造り、體驗、詳しくは主観性作用性、流續性、非反復性、融合性、統一性、變化性、一時性と、快不快性とを本質とし、意志及び理解に伴隨、纏綿し、且、意識中、理論的にも、實踐的にも、處理が最も困難であり、随つて危険性が最も多く、それだけ又重要なものである。

(二) 本質。感情の本質は、一言に體驗性である。體驗性とは、識即在、即ち識ることに於て在り、且、識るものと識られるものとが、一で、我に於て我を識り、随つて、具象的、全體的なものである。尙、感情の體驗性は形式的と實質的とに別つことが出来る。

(1) 形式的本質。感情の體驗性を形式的方面から見れば、左の

四特質となる。

(イ) 主観性作用性。感情は、理知と異り、嚴密な意味では對象となり得ないものである。但し、感情が對象化されないといふことは、感情に於ては、意識するものと意識されるもの、即ち、意識の作用と内容とが一に融合してをり、随つて感情の存在も理解も、只體驗の様式に於てのみ可能だといふことである。實に感情に於ては、感ずるものが我が意識即ち我れの性質又は状態で、いはば、我れが我れの性質、状態を感じ意識し、我れ以外の對象は、例へば、友人の死を悲しむのは、友人の死其のものを悲しとするのではなくて、友人の死を悲しと感ずる我れを感ずる如く、只間接に、即ち對象の意識ではなくて對象についての我れの意識を通してのみ感情の對象となり得るのである。

然るに、感情が主観的だといふことは、他面から見れば相對的だといふことである。實に、感情は時と所とに於て趣を異にし、随つ

て、量的に測ることも比較することも出来ない。これ、感情の個人差が特に顯著であると共に感情判断に誤謬が多く、随つて藝術的評價の困難な所以である。

(口) 流續性非反復性。感情は、いはば流れで、一瞬の過去にも戻還することが出来ず、又如何にしても同一の経験を繰り返すことが出来ない。勿論、嚴密にいへば、意識は凡て流續的非反復的であるが、大まかな意味では、意志も理知も反復が可能であると共に必要である。即ち、反復すればする程、意志は鞏固になり、理知は明白になるのである。これに對して、感情は、反復すればする程、其の強度即ち所謂清新味を減するのである。但し、類似の感情殊に知的要素の多い情操(後文再述)を反復すれば、習慣や惰性を生じて所謂趣味又は嗜好となることは、其の他の意識現象と同様である。

(ハ) 融合性統一性。感情は流れであるが故に、分析は不可能である。感情には、文字通の部分といふものがなく、凡ての部分が所

謂「部分全體」で、全體を支配する特色が顯著である。例へば、指の先の痛みから起る不快感が全意識を支配したり、或る人の一部分を好ましく感ずると其の全體を好ましく感じたりする。これは、多數人の感情に於ても同様で、例へば、趣味や嗜好の一致してゐるものが、其の他一切の相違を排除して親交を結んだり、理窟では如何ともすることの出来ない關係が感情によつて手もなく解決されたりするのである。感情が、傳染性を有し、流行を始め群衆心理や社會心理の一主動力となるのも、蓋し又これがために他ならない。更に、新感情が如何に感せられるかは、それに先立つ舊感情に負ふ所が多い。例へば、快感を感じてゐる時には多少不快なことがあつても不快を感じなかつたり、悲哀に沈湎してゐる際の同情は異常に強い感謝と喜悅とを招來したりするが如き(感情の蔓延及び轉嫁)である。

(ニ) 變化性一時性。感情は融合的統一的であるが、それは理知

や意志に比べると寧ろ一時的である。勿論感情中にも後述の如く情操や異常の悲喜や愛憎の情緒等には永遠的なものがないでもないが、一般に感情は、變化的一時的な所に其の特色があることは、感情的といふことが變化的といふことと異語同義視されること、及び女子や子供や感情家の性格などに徴しても明かである。但し感情が變化的だといふことは、理知が變化的だといふことは趣を異にする。理知の變化性は進歩性を意味するのに對し、感情の變化性は單なる變化性だからである。そしてこれは感情の永續性に於ても同様で、進歩的であるよりも寧ろ保守的であることが多いのである。

(2) 實質的本質——快不快。感情の實質的本質は、快不快である。世には快不快を以て所謂單純感情の屬性とするものも少くないが、これは謬見である。快不快は、あらゆる感情の基調であると共に、單純感情は抽象だからである。これと共に、興奮と沈靜緊張と

弛緩を感情の副貳的特質と見るのは正しいが、これを快不快と同格視するのは誤りである。但し、この點については、後文、單純感情の項に於て再述することとする。

(三) 價值。感情は、その性質が不明であり、且其の研究が困難であるが、而も其の意識並に人生に於ける地位乃至價值は極めて高大である。古今東西の學者思想家、殊に修養を志し教育に従ふ人達が、感情を惡魔視したのも、蓋しこれがためである。實に、恐るべく戒むべきは感情である。見よ、有爲な男女にして感情の擒となるために可惜一生を棒に振るものが如何に多いかを。そしてこれは、特に不良者に顯著な事實である。實際、男女を問はず、罪を犯すものは、大部分感情が不健全である。而も感情上の缺陷は、品性ばかりでなく、知識技能の發達をも阻害するのである。併しながら感情は、單に恐るべく戒むべきものではなくて、更に尊むべく活かすべきものである。感情は、惡の原因であると共に又善の動力

だからである。如何程聰明な理知を有し、如何程剛宕な意志を持つものと雖も、優美にして熱烈な感情を缺如する時には、到底眞に尊敬すべき人物となり得ないからである。そして恐るべく戒むべきは主として情緒であり、尊むべく活かすべきは主として情操である。

(四) 感情と理知及び意志。以上の略述によつても明かなやうに、感情は理知殊に感覺とは殆ど正反對ともいふべき關係を有するものである。感覺は客觀的分析的で、注意すればする程明瞭となり、且同一刺戟は同一感覺を起すのに、感情は殆ど其の反對であるが如き、即ちこれである。併しながら、身體と密接な關係を有する點に於ては、兩者其の揆を一にする。これに對して、感情と意志とは、前述の如く、極めて密接な關係を有し、具象的には峻別するところが出来ない場合さへ少くない。尙、感情の理知及び意志と異なる特質として擧ぐべきものは、それと身體との關係が密接であり、殊

に其の表出が顯著なことである。

(五) 感情と身體。感情と身體即ち生理作用とが殊に密接な關係を有することは、氣質に徴しても明かである。感情の本質觀に身體や生理作用を根據とするものが少くないのも亦これがためである。そして感情と身體との關係には、前述の如く、感情が身體の影響を受ける場合と感情が身體に影響する場合との別があるが、其の中で最も重要な意義を有するものは、表情である。

凡そ意識は、必ず何等かの身體的表出を伴ふのを通則とするが、感情殊に情緒に於て此の特色が最も顯著である。そして、表情の本質觀には、原因説又は中樞説と結果説又は末梢説との別があり、表情の種類の代表的なものは、顔面表情と表情的身振とである。

(六) 種類。感情は、其の發達段階又は單複の相違によつて、複雑感情と單純感情とに別つことが出来る。

(1) 複雑感情。これは、複雑な知的内容を有するもので、更に情

緒と情操と複合感情とに別つことが出来る。

(イ) 情緒 (Emotion)。これは、最も具象的典型的な感情、即ち感情の特質を最も十分に具へると共に、觀念を内容とする感情である。

(ロ) 情操 (Sentiment)。これは、情緒より一層複雑高等な知識、即ち複雑な觀念又は概念を内容とし、随つて感情としての特色が幾分尠少な感情である。

(ハ) 複合感情 (Compound feeling)。これは、其の複雑さに於ては、情緒と單純感情との中間に位するもの、即ち、單純感情の複合したものである。

(ニ) 單純感情 (Simple f.)。これは、感情の抽象的單位で、個々の感覺を内容とし、快不快を本質とするものである。

(七) 障礙。感情の障礙は、内容の障礙・興奮性の障礙・反射性の障礙・性質の障礙等に別つことが出来る。この中、感情の性質の障礙とは、感情倒錯のことで、常人が快とするものを不快とし、不快とするものを快とするものである。尙、これには、感覺的なもの、例へば

食味倒錯(妊婦に特に多い)、色情(性慾倒錯と、道德的なもの、例へば嘘つき、殘殺を好むもの、神社佛閣の破壊を好むもの等所謂感情犯罪者同情や愛他心や愛情等が興奮した結果犯罪者となるもの)の感情との別がある。

第二節 複雑感情

第一項 情緒

(一) 意義。情緒は、最も具象的典型的な感情で、多少複雑な内容を有し、一定時間一定形式に従つて發動し、急激にして强度高く、自他の心身に對する影響が大きく、且身體的表出の顯著なものである。

情緒が最も具象的典型的な感情だといふのは、情操に理知的要素が多く、單純感情が抽象的であるのに對し、情緒は感情としての特質即ち體驗性を最も多分に具備してゐるからである。情緒が多少複雑な理知的要素を内容とするとは、知覺又は觀念等數種の理知作用を内容とすると共に、所謂單純感情が單に快・不快を根本屬性とするのに對し、其の他の屬性を有し、且幾分客觀的であることを意味する。次に、情緒は、自他殊に當人の心身に對する影響が

大きく、他の觀念や感情を抑制して全意識を支配する結果其の平衡を破りがちであり、甚だしきは、思慮分別を失はしめるどころか、死を招致するに至ることさへ稀ではなく、更に其の強度が高いために、刺戟の去つた後までも作用することを常とするのである。顔面表情を始め、顯著な身體的表出が伴ふのも、情緒の一特質である。

(二) 情緒と意志。前述の如く、感情と意志との關係は本來極めて密接であるが、特に情緒と意志とがさうである。情緒中に本能的情緒例へば愛情恐怖憤怒等が多いのも、情緒が行動の動力となる場合が多いのも、蓋し、これがためである。尙、情緒が一旦發動すれば、(イ)意志を動かして行動となるか、(ロ)他の情緒に轉讓するか、(ハ)氣分となるかである。

(三) 發達。情緒の發達は主として其の内容となる理知の發達に準ずる。兒童の情緒は概ね本能的で、粗笨・極端であると共に、一

時的、一面的、皮相的である。そして最も早く發動するのは、自己保存の本能に關する情緒、即ち恐怖や憤怒等である。

青年の情緒は、兒童の情緒と著しく異り、(イ)廣く、強く且執拗であり、随つて青年が其の支配を受けることが多く、殊に女子に於てさうであり、(ロ)誇張的であり、(ハ)自ら悲しみを樂しむこと等が其の主要特色である。

(四) 種類。情緒の分類は、其の性質上、困難であるが、茲には、性質・強度・経過の形式及び時間の四標準から分類することとする。

(1) 性質からの分類。これは、快的と不快的・興奮的と沈靜的及び緊張的と弛緩的との別を始め、個人的(恐怖・憤怒・驚駭・悲哀・憂慮・疑惑・希望・期待・滑稽等)と社會的(同情・愛情・憎惡・羞恥・嫉妬・美望・競争心・名譽心・虛榮心・攻撃的(憤怒・憎惡等)と防禦的(恐怖・臆病等)自己保存的(喜悅・悲哀等)と種族保存的(愛・同情等)との別である。

(2) 強度からの分類。これは、強い情緒と弱い情緒との別である。

(3) 経過の形式からの分類。これは、急激に高まるもの(驚駭・憤怒の如き)と、徐々に高まるもの(憂慮・疑惑の如き)と、間歇的のもの(即ち高まつたり低まつたりするもの(不安・悲哀の如き)との別である。

(4) 時間からの分類。これは、過去に關するもの(失望・後悔等)と、現在に關するもの(喜悅・満足等)と、未來に關するもの(希望・憂慮等)との別である。

第二項 情操

(一) 意義。情操(Sentiment)は、複雑高等な理知作用に伴ふ感情、即ち情緒が理性によつて醇化されたもので、情緒に比して一層自覺的客觀的、緩續的、内面的な感情である。

(二) 特質。第一に、情操が自覺的だといふことは、本能的、自然的ではなく、理性によつて統制され、随つて感情の意味及び價値を理解すると共に、其の發動も制止も自由であることを意味する。

第二に、情操が客觀的だといふことは、主體の實生活的利害關係を超越して、對象其のものの價値を主とし、随つて多數人に共通する普遍性を有することを意味する。

第三に、情操が緩續的だといふことは、其の發動が突發的ではなくて、緩徐的であり、其の過程が急變的ではなくて、靜移的であり、其の期間が一時的ではなくて、永續的であることを意味する。

第四に、情操が内面的だといふことは、身體との關係が密接でな

く、身體によつて制約される度合が低少であると共に、身體的表出も微弱であることを意味する。

斯くの如く、情操は、情緒の醇化、即ち理性化されたものであるが、故に其の萌芽は、情緒中に含まれ、随つて情緒に後れて發生するが、一旦成立すれば、却つて情緒の原因となり、兩者相互に因果關係を形造ることは、例へば、屢々喜悅(情緒)を與へた人を尊敬(情操)すると共に、尊敬する人の行爲は、凡て喜悅を與へるが如きである。

(三) 價値。情操は、最も高等な感情であるから、意識の發達したもので、即ち所謂教養あるものに獨得な感情であると共に、人間の生活上極めて必要なものであり、且情緒の如き危険性や害毒の少ないものである。随つて、情操の高低乃至種類がやがて感情方面から見た人間や文化の價値の高低であるといはなくてはならない。

(四) 種類。情操を別つて、美的、宗教的、倫理的及び論理的の四種とする。

第三項 複合感情

(一) 意義。複合感情(Compound feeling)は、單純感覺に伴ふ感情の複合したもので、簡單な知覺に伴ふ感情、又はこの兩者が複合したものである。但し、其の主要なものは、視覺及び聽覺に伴ふものであると共に、それは通例美的であるが故に、また初等美的感情とも呼ばれ、且美的情操の内容ともなるものである。

(二) 種類。複合感情を別つて主觀的複合感情と客觀的複合感情とする。前者は、例へば、物に熱中してゐる時に興奮と緊張と快とを感ずる如く、主として主體の心身状態から起るものであり、随つて又状態感情とも呼ばれ、後者は、主として對象の性質によつて其の内容を異にするものであり、そしてこれは、更に、色彩感情・音響感情・形態感情・時律感情に別れる。但し、客觀的複合感情といつても、それは勿論比較的のことで、複合感情は、情操はもとより、情緒のやうな複雑な理知作用を内容とするものではなくて、單純な理知

作用即ち感覺作用及び極めて單純な知覺作用に伴ふ感情である點に、其の特色があることを忘れてはならない。

第三節 單純感情

(一) 意義。單純感情 (Simple feeling) は感情の抽象的單位で、感覺に伴ふ感情又は感覺を内容とする感情であり、隨つて感覺的感情 (Sensory feeling) とも呼ばれ、快及び不快 (Pleasantness and unpleasantness) を本質とするものである。

但し、單純感情の本質觀には異説がある。そして其の代表者は二方向説と三方向説とである。二方向説とは、快・不快及び安・靜・不安を感情の屬性又は方向するロイス等の説であり、三方向説とは、快・不快・興奮・沈靜及び緊張・弛緩を感情の屬性又は方向とするヴントの見解であるが、後者が有名且重要である。

(二) 單純感情の三方向説。ヴントに従へば、單純感情の性質は無限に多様であるが、以上の三方向は何れも感情的無記點を通過して對立的系列を形成するものであり、且これは空間の三次元に

比すべきものである。そして(一)快・不快感情は、主として有機感覺・聽覺・味覺・嗅覺等の所謂下等感覺に於て顯著であり、且動物の生命存續に直接關係を保つものである。次に(二)興奮・沈靜感情は、主として視覺・聽覺等の所謂高等感覺に伴ひ、且各感覺の質的差異に應ずるもので、例へば、視覺に於ては白・赤・橙・黄等は興奮調であり、黒・青・藍等は沈靜調である。(三)緊張・弛緩感情は、特定の感情に伴ふものではなくて、注意の程度に應ずるものである。例へば或る刺戟の起るのを今か今かと待つてゐる時には緊張の情が生じ、刺戟が起れば弛緩の感が生ずる如きである。

以上のヴントの説は、單純感情の種類を快・不快のみに限らない所に長所があるが、興奮・沈靜及び緊張・弛緩の二形式又は二方向を快・不快と對立する同位的形式又は方向と見る所に短所がある。蓋し、快・不快は、單純感情の根本特質であり、他は副貳的で、必ず快・不快に伴ふものだからである。

(三) 快不快の本質。快不快は、等しく積極的感情であり、且快不快は、意識全體に關係を有し、快は健全な意識に伴生すると共に意識を健全にするのに對し、不快は不健全な意識に伴生すると共に意識を不健全にするのは、否み難い事實である。

次に、快不快の特質について見るに、(イ)中庸の強度の刺戟は中庸の快感を惹起す(期待した刺戟は特にさうである)。(ロ)過度の強弱の刺戟は不快感を惹起す。(ハ)快感又は不快感を起す刺戟の強度を強めると快感又は不快感の強度も強まり、反對に、刺戟の強度を弱めると快感又は不快感の強度も弱まる。(ニ)不快感は一定の強度に達すると快感を増したり快感に轉じたりすることがなくて單に不快感の度を増すだけである。(ホ)刺戟の連續が一定の範圍内で感情の強度に影響を及ぼすことは、同一刺戟が連續して加へられると感情が鈍つて其の強度が次第に減少する(即ち反對に新しくて珍しい刺戟は概して強い感情を起す)ことに徴して明かである。

ある。(ヘ)刺戟の性質が異れば感情の性質も異なる。例へば、高等感覺(聽覺及び視覺)に伴はれる感情よりも劣等感覺(觸覺・味覺・嗅覺)に伴はれる感情の方が一層顯著な快不快の傾向を具へるのである。

第八章 理知

第一節 概説

(一) 意義。理知(Intellect)は、意識の客觀的對象的受動的方面で、普遍性、抽象性及び進歩性を特質とし、對象を認め、且其の意味を識る作用及び内容である。そして、其の作用の方面を理知作用又は認識といひ、其の内容の方面を知識といふこともある。

(二) 本質。理知は、意識の客觀的對象的な方面であるが故に、意識中、最も研究し易く、随つて最も明瞭であり、受動的にして普遍的な方面であるが故に、意識中、最も抽象的、非人格的で、身體殊に感覺器官の制約を受けることが最も多大でありながら、身體に及ぼす影響が弱少であると共に、全體としての意識に對する關係も情意に比して一層偶然的であり、随つて其の變化も自由且迅速である。

そして茲に、理知が意識中最も進歩的だと見られる一個の理由がある。但し、意識は、反説したやうに、本來統一體であるが故に、これらの理知の特質は、畢竟、比較的事ことで、具象的には、情意と關聯し、随つて、主觀的、作用的、發動的方面をも具備してゐる。

(三) 價值。理知は、意識の第二義的方面であるにも係らず、量的には、意識殊に顯在意識の大部分を占め、且情意の實質を形造ると共に、それらの發達の主要動因となるために、其の價值は、兎角過大視されがちである。而も、理知は、外界との關係が近密であり、且常識や科學の如く生活の方法手段の主動力であるがために、實際的價值が、意識中、最も多大であることは否むべくもない。

(四) 種類。理知は、種々に分類されるが、これを其の單複の順序に従つて分類すれば、感覺知覺(再生知覺をも含む)及び思惟となる。但し、一般、殊に、要素心理學に於ては、感覺が最も單純で、知覺や思惟は其の複合體と見られるのを常とするが、これは謬見で、最も具象

的なものは、寧ろ知覺で、思惟がこれに次ぎ、感覺は、恰も單純感情と同様、單に抽象的なもの、即ち、知覺を分析して得られる抽象的單位に過ぎない。理知は認識であり、認識は意味の理解であり、意味の理解は對象として認めると共に、對象と全體との關係を識ることであり、そしてこれは單に對象の刺戟を感知する感覺に於ては不可能だからである。随つて、以下、先づ、知覺の考究から出發するこゝとする。

第二節 知覺

(一) 意義。知覺 (Perception) は、最も具象的な理知又は理知の典型で、感覺器官の直接的又は間接的刺戟に依つて、現在意識に映じた外的對象を認識することである。例へば、机上の百合の花を見て「これは百合の花だ」と認識する如きである。そして知覺中、特に内容成果の方面、詳しくは、感覺器官の刺戟なくしても現出し得る自由にして主觀的な心像のみを指して觀念 (Idea—英吉利流) 又は表象 (Vorstellung—獨逸流) といふのに對して、作用のみを知覺・知覺作用又は表象作用と稱し、觀念を再生知覺の一種と解することもある。(尙、教育上では、知覺を直觀と呼ぶことが少くない。)

(二) 特質。知覺の特質は、客觀性・有意味性・同化性・統一性である。

(1) 客觀性。知覺は、客觀的に存在する外物についての知覺であり、随つて知覺は必ず感覺器官を媒介とする作用である。但し、

等しく客観的に「存在」といつても、存在の仕方に現在過去及び未來の區別があるために、知覺にも亦三種の別を生ずる。そして狭義の知覺は、最も具象的な理知であるが故に、當然現在存在する外物を認識することであるのに對し、過去に存在した外物の認知は記憶であり、未來に存在する外物の認識は想像である。尙、知覺の客観性に該當する方面は把住(Apprehension)とも呼ばれる。

(2) 有意味性。知覺は外物の認識である。そして認識とは、外物の獨自性即ち其のもののみ具有する特性及びそれが其の他のものと如何なる異同關係を有するかを理會することであり、そしてこれは、勿論單なる受動作用ではなくて、發動作用、即ち意識が外物に何等かの意味で働きかけ、且これを制御する作用である。随つて、同一の外物も意識の性質及び状態によつて異つた知覺を生ずるのである。これ、知覺が感覺と異なるのは勿論、單なる感覺の集合とも異なる所以である。即ち、感覺は百合の花を見て只白しと感

じ、葉を見て只青しと感ずるだけであるのに對し、知覺はこれを、白百合の花であると認めるのである。随つて、知覺は勿論一個の判斷(所謂知覺判斷である)と共に、單なる外物の受容模寫ではなくて、其の意識化即ち有意味化である。然らば、如何にすれば、謂ふ所の外物の有意味化が可能であるか。それはやがて同化作用以外の何ものでもない。

(3) 同化性。同化又は類化(Assimilation)とは、意識が、新刺激即ち新意識作用を、それと類似の舊意識作用に結合させることによつて、自己の一部と化成することである。知覺は、「外物」の認知である點に於て客観的であるが、外物の「認知」である點に於て主観的である。即ち、知覺が成立するには、客観的條件と主観的條件との統一を必要とする。客観的條件とは、いふまでもなく、感覺器官が外物から刺激を受け取ること即ち外物の感覺であり、主観的條件とは、同化の直接動力たる新刺激に類似した過去の意識作用であり、

そしてこの兩條件が融合したものがやがて同化又は類化である。斯くして、同化とは、畢竟、舊經驗によつて新經驗を解釋することであるが、これには三つの作用が含まれてゐる。選擇補充變化が即ちこれである。

(イ) 選擇作用とは、外物の無數の刺戟の中から知覺成立に必要なものだけを選択して他を捨てることで、所謂猪追ふ獵夫山を見ずの如き、或は多數人の中から只一人の知人の顔を見出すが如きである。斯くして、知覺は、感覺の總合よりも少量の内容となることがある。

(ロ) 補充作用とは、現在の刺戟を構成要素とする知覺を成立させるために、不足な感覺を補ふことで、例へば、空から落下する白片を見て雪を知覺したり、暗夜に轟く音を聞いて汽車を知覺したり、脱字を補つて文章を読んだり、目や顔の輪廓だけ描いた繪を顔と見たりするが如き、即ちこれである。随つて、知覺の内容は、感覺の

總合より遙に豊富になることがある。

(ハ) 變化作用とは、刺戟がそのままに受取られないで變化して受け取られることで、逃した魚が實際より大きく見えたり、鼠の音を盜人の音と聞いたりするが如きである。これやがて、知覺に錯覺の最も多い所以である。

要するに、知覺は、一面注意による感覺の單純化であると共に、他面記憶による感覺の複雑化である。

(4) 統一性。知覺は、單なる刺戟の集合ではなくて一個の統一作用である。随つてこれを感覺に分析し悉すことが出来ない。例へば、レモン水がレモンと水とではない如きである。但し、知覺の統一作用には性質的統一・數量的統一・時間的統一・空間的統一の別がある。

(三) 種類。知覺を別つて先づ狹義の知覺と再生知覺とする。そして前者は、更に時間知覺・空間知覺・變化知覺及び運動知覺とな

り、後者は、更に觀念、記憶、想像となる。

(四) 發達。知覺は、前述の如く、相當に複雑な作用であるが故に、感覺其のものの發達は勿論、意識全體の發達、就中感覺相互の連絡作用や注意作用等の發達に準ずるものであり、隨つて其の個人差が相當に大である。そして比較的早く發達するものは視覺に依る空間知覺であるが、知覺一般の發達は、大凡左の四期に別つことが出来る。

- (1) 個物期。事物を個々別々に觀察し知覺する時期で、七歳頃までを包含する。
- (2) 活動期。専ら人物の活動や事物の作用等に着目する時期で、八歳頃に該當する。
- (3) 關係期。事物相互の空間的、時間的及び因果的關係に注意する時期で、九歳頃から始る。
- (4) 性質期。事物の性質を分析して觀察する時期で、十三歳以後に該當する。

後に該當する。

(五) 障礙。知覺の障礙には、一時的のものと永續的のものとの別がある。一時的の知覺障害とは、錯覺又は幻覺であり、永續的の知覺障害とは、長期又は不治の精神病である。以下、錯覺及び幻覺のみを略述する。

(1) 錯覺 (Illusion)。錯覺とは、前記同化作用殊に補充作用の錯誤によつて生じた知覺の障害で、外物即ち客觀的對象を其の本來の性質と異つたものと認知する作用であり、要するに、外的刺戟を誤つて解釋する作用である。

廣義の錯覺は、其の原因によつて、末梢(感覺的、生理的)と中樞的(知覺的、心理的)とに別れ、且、知覺上の錯覺は勿論、後者のみを指すが、具象的には、兩者混同する場合が多いので、茲には、便宜上兩者を一括して説明することとする。

(イ) 末梢的錯覺。これは感官の生理的構造の特質に原因する

もので、何人にも免れ難いものであるが、特に個人的なものもある。そしてこれには、錯味錯嗅等多數あるが、就中錯視即ち視覺に伴生する錯覺が最も顯著である。例へば、縦の長さは横の長さより過大視され、限られた面積は限られない面積より過小視されるが如きである。

(ロ) 中樞的感覺。これは、腦中樞作用即ち前記同化作用の錯誤に因由するもので、具象的には豫期先入的偏見、恐怖等の感情興奮、疲勞睡氣等の意識孱弱印象の不明等を原因とするものであり、殊に期待即ち豫期注意を原因とするものが最も顯著である。例へば、耳の近くで唸る蟲の羽音を空飛ぶ飛行機の音と思つたり、枯尾花を幽霊と見たり、綿一貫目を鐵一貫目より軽く思つたりするが如きである。

(2) 幻覺 (Hallucination)。知覺に應ずる外的刺戟がないにも係らず、それが存在すると同様な知覺を生ずること、即ち一言に、外的刺

戟なくして生ずる知覺である。但し、嚴密にいへば、幻覺を無刺戟知覺としてこれを錯覺と全然區別することは、困難でもあり又不當でもある。所謂幻覺と呼ばれるものにも、フロイドの力説するやうに、時間が遠いか或は刺戟が微弱であるために認識されないやうな外的刺戟や外的刺戟に匹敵すべき内的刺戟が存在することも少なくないからである。事實、例へば強迫觀念の如く、錯覺の原因が強くなる時には幻覺となることがある。随つて、嚴密には、寧ろ、幻覺は刺戟がないのではなくて、刺戟を自覺しないのであるといふ方が妥當である。そしてこれには、幻視、幻聽、幻味、幻嗅、幻觸、幻運動感覺、幻有機感覺の單純なもの又は複合したもの等諸多の種類がある。尙、これが永續的になれば精神病者となるのである。

第三節 思惟

(一) 意義。思惟 (Thinking) は、最も複雑高等な理知作用で、事物事象の関係を定め、其の意味を明かにし、疑惑を解き、斯くして、理知其のもの、の真相を明かにし、且論理的價值即ち真理を構成する發動的抽象的作用であり、其の成果又は内容は思想と呼ばれる。

思惟を、複雑にして發動的な理知作用だと稱するのは、知覺のやうな單なる理知作用ではなくて、進んで疑問を構成し且これを解決しようとする目的を有する有意作用であると共に、不安感情を伴ふものであるがためであり、高等な理知作用だといふのは、理知作用の最高使命であると共に意識の一本質たる自識又は自覺、即ち識ることを識る反省の直接動力であるがためであり、抽象的だといふのは、個々の具象的知覺に共通する一般性を對象とするがためである。そして思惟は、發動的な點に於て想像に類似するが、

而も想像に比して抽象的一般的であると共に確實明瞭である。尙、思惟は有意的であるがために、其の終局は行爲に具象化されることを原則とするものであるが、純理的なものも少くはない。

(二) 發達。思惟は、複雑高等な理知作用ではあるが、而も其の萌芽は、既に單純低級な理知作用に現れる。これを具象的にいへば、概念や判断の萌芽は既に知覺中に現れる。例へば、幼兒が常に母の側に居ることによつて、何時とはなしに母といふ概念を有するやうになり、二歳頃から概念が大に進み、人を精細に見別けるやうになるが、尙不完全で、同一の概念も其の内容は千差萬別である。判断に於ても亦同様で、幼兒が母を見て母とするのは、既に一個の判断であつて、學齡期頃の兒童は相當に發達した判断力を具へてゐるが、部分を全體と見たり、蓋然的のことを實然的又は必然的と見たりすることが多い。推理は最も遅れて發達し、學齡期に於ても誤謬が相當に多く、判断の誤謬同様、部分を全體と見るのが常で

ある。

(三) 種類。思惟は前述の如く、概念判断及び推理に別つことが出来る。但し、この區別は絶対的ではない。概念は判断の成果であると共に、倒に判断の要因内容であり、推理は判断の複合だからである。随つて、具象的に見れば、判断が思惟の典型で、その單純な一面が概念であり、その複雑な一面が推理である。この他、直觀體験了解等の作用もあるが、これらは心理學上の思惟作用であるよりも寧ろ哲學上の思惟作用であると共に、狹義の理知作用であるよりも寧ろ廣義の理知作用即ち多分に情意作用を包含したものである。

第四節 感覺

(一) 意義。感覺 (Censation) とは、最も單純な理知作用即ち最も單純な意識の客觀的對象的受動的方面で、例へば、白い梅の花から、白い色、よい香等の感覺を得るやうに、意識の二重的抽象、即ち先づ情意を捨象し、次に知覺及び思惟を捨象することによつて得られると共に、一定の物理的刺戟と一定の生理的器官とを條件とするものである。

但し、感覺が最も單純な理知作用だといふことは、理知の具象的單位即ち要素だといふことではなくて、複雑にして具象的な理知作用即ち知覺を分析して獲られる抽象的單位だといふことであり、随つて、知覺や思惟を感覺の集合と見るのが誤であることは、既に一言したところである。

感覺が一定の物理的刺戟と一定の生理的器官とを條件とする

といふことは、感覺は、必ず妥當な刺戟が生理的器官即ち所謂感覺器官を通過して生理的刺戟となり、大脳皮質に於ける感覺中樞を興奮せしめる結果として生ずるといふことである。随つて、感覺の性質は、刺戟と感覺器官との性質に制約されるのである。事實、感覺器官を缺くものには、それに相當する感覺も缺けてゐると共に、感覺器官の發達がやがて感覺の發達である。

(二) 本質。感覺の本質を形造るものは、性質と強度とである。

(1) 感覺の性質(Quality)とは、一感覺が他の感覺例へば色が音から區別される根本特色であり、(2) 感覺の強度(Intensity)とは、感覺の強弱で、例へば、音の高低大小を定める根據となるものである。

尙感覺の強度に聯關して一言すべきは、感覺の量的限度についてである。感覺の量的限度とは、刺戟力の多少に應じて、器官が興奮しなかつたり、感覺の差即ち増減を感じなかつたり、又はそれ以上興奮が高まらなかつたりする數量的限度で、下限即ち刺戟閾と

上限即ち刺戟頂と辨別閾とに別れる。

(イ) 感覺の量的下限即ち刺戟閾とは、始めて感覺を生起するに要する刺戟の強度で、器官や刺戟物や刺戟時間やの相違によつて制約される。(ロ) 感覺の量的上限即ち刺戟頂とは、それ以上刺戟が強くなつても感覺が強くない點で、これまた刺戟閾同様の制約がある。(ハ) 辨別閾とは、感覺の量的差異即ち感覺の増減を識知し得る最小強度差異である。尙原刺戟と辨別閾との比を相對辨別閾と稱する。所謂ヴェーベル及びフェヒネルの法則は、この相對辨別閾が感覺の種類に應じ、或る範圍に於て一定なことを明かにしたものである。

(三) 種類。感覺の種類は、主として感覺の刺戟の所在と生理器官の相違とによつて區分されるのである。即ち、先づ刺戟の内外から別てば、外的刺戟より起る感覺は、視覺、聽覺、味覺、嗅覺、觸覺であり、内的刺戟より起る感覺は、有機感覺、平衡感覺、運動感覺である。

次に、特別の器官の有無によつて別てば、一般感覺、皮膚覺を外的一般感覺といひ、有機感覺を内的一般感覺といふと特殊感覺、視覺、聽覺、味覺、嗅覺となる。更に、生理器官の單複によつて別てば、視覺と聽覺とは高等感覺に屬し、他は下等感覺に屬する。そして視覺が最も複雑であり、皮膚覺が最も單純である。因に、テイチナーによれば、感覺の種類は四萬四千四百三十五種の多きに上るとのことである。

尙、感覺器官は、極めて早く發育するもので、通常幼兒に於て既に一通完成し、殊に皮膚の如きは成人に比べて一層鋭敏なのを常とし、目の如きは生時既に成人の半ばに達してゐる。

第九章 社會意識

(一) 意義。社會意識 (Social consciousness) は、意識の社會的方面、即ち多數人に共通一致する意識の作用及び内容で、所謂社會心理學の對象である。

社會意識の研究は古代より行はれてゐたが、其の研究の主體も客體も不定であり、殊に後者は斷えず變化すると共に異常的分子を多分に包有するがために、何時までも常識的範圍を脱することなく、それが嚴密な意味で、社會心理學と呼ばれるやうになつたのは、極めて最近のことに屬する。そして其の研究法の特色は、客觀的集團的なこと、即ち觀察法や統計法を主とするところに存する。而も、一言に社會心理學といつても、これを心理學の一分野と見るもの即ち意識の社會的方面の心理學的研究と見るものと、社會學の一分野と見るもの即ち意識の社會學的研究と見るものとの別

があるが、前者が妥當であることはいふまでもない。尙、社會意識の研究が特に隆盛なのは、佛蘭西・米國・獨逸等であることも既に一言したところである。

(二) 特質。社會意識も、意識の一分野であるが故に、其の本質は意識の本質と同様であるが、これを所謂個人意識から區別して、特に社會意識と稱する限り、其處に何等かの特質がなくてはならない。そして、社會意識の特質は(一)集團的・永續的ではあるが、而も其の範圍が不明であると共に、其の形式も内容も斷えず且迅速異常に變化すること、(二)ゾントの所謂創造的綜合及び目的異様化の原理を形式的原則とし、模倣・暗示・協力・同情・愛情・同類意識・威壓・利害意識又は共榮意識乃至同感等を實質的原則とすること、(三)情意就中意志が其の中心を形造ること、(四)其の構成乃至發達に於て、自然的(土地・氣候等)物質的・生理的・經濟的及び偶然的(天災・地變・社會の突發事件)要因が特に重大な意義を有すること等である。

(三) 種識。社會意識は種々に分類することが出来る。先づこれを時間的立場から見れば、一時的のものと永續的のものとなる。前者は更に其の内容から、群集意識・流行意識・輿論及び時代意識等に別れ、後者は更に慣習・民族意識又は國民意識等に別れる。次にこれを性質的及び數量的立場から見れば、一方、道德的社會意識・藝術的社會意識・宗教的社會意識・政治的社會意識・法律的社會意識・教育的社會意識・言語的社會意識等となり、他方、家族又は血族意識・地方意識・國民意識・民族意識・職業意識・階級意識等となり、更にこれを状態から見れば、正常意識と異常意識となる。

第十章 異常意識

(一) 意義。異常意識 (Abnormal consciousness) は、意識の異常な方面である。但し、異常意識の解釋には、狹義と廣義との別がある。前者は、正常意識以下のもの、即ち低能意識及び病的意識のみを異常意識と見るものであり、後者は、高低又は病否を問はず、凡そ正常意識以外のあらゆる意識、即ち高能意識、低能意識及び病的意識を異常意識と見るものであり、且後者が妥當である。

異常意識の研究が最近に屬することは、既に一言したところである。そしてこの方面が遅れたのは、其の研究が困難なためである。即ち研究者は、大抵異常意識に關する體驗を缺き、隨つて其の内省的研究が不可能乃至困難であると共に、異常意識特に病的意識は、觀察も實驗も困難乃至不可能であるがためである。隨つて、異常意識を研究するには、一般研究法以外に、生理學や醫學を始め、

動物心理學や藝術や宗教等の補助によつて、出来るだけ正確に近いものにすることに努めなくてはならない。尙、異常意識の研究の特に隆盛なのは、佛蘭西、伊太利及び英吉利であることも、既に一言したところである。

(二) 特質及び種類。異常意識の特質は、所謂異常な所に存すると共に、其の間に三種の別があるために、前項社會意識の特色のやうに、系統的又は概括的に闡明することが出来ないから、以下、其の種別を明かにし、且其の代表的なものの特質を略記するだけに止めて置く。

異常意識は、先づこれを性質的立場から見れば、前述の如く高能意識、低能意識及び病的意識となり、時間的立場から見れば、一時的のもの、と永續のもの、及び先天的のものと後天的のものとなり、數量的立場又は範圍から見れば、個人的のものと團體的のもの、及び部分的のものと全體のものとなり、更に其の原因から見れば、

自然的のものとは人為的のものとなる。

(1) 高能意識。これは、優秀卓抜な意識で、俗に天才や偉人等と呼ばれるもの、即ち嚴密には、前記知能の分類中の天才及び穎才又は最上知の意識である。そしてこれは主として稀現的であり、隨つて個人的であると共に、部分的であるが、勿論例外も少くない。そして斯かる意識の稟有者の共通特色は、意志の方面では、旺盛な向上心と強烈な執着心と深い有意的注意力、感情の方面では、感激情熱、興味、理知の方面では、高遠な想像力と精緻な思惟力とに富み、更に、鋭敏な感官と巧妙な技術とを備へてゐることである。この他、早熟や晩熟や精力旺盛や仕事の能率の高いこと等、諸多の副貳的特色がある。

尙、高能意識は、其の内容に依つて、意的、情的、知的、官能的、技術的等を始め様々に分類することが出来る。

(2) 低能意識。これは、低劣薄弱な意識で、廣狹三種の見方がある。

廣義のものは、前記知能中の低能以下のもの全部を包括するものであり、狹義のものは、低能と愚鈍とのみを指し、白痴から區別するものであり、最狹義のものは、愚鈍及び白痴から區別するものである。そしてこれらは、其の何れを問はず、其の原因には、先天的と後天的との差別があるが、殆ど生涯的不治的である點は同一であり、隨つて其の大半は病的である。

(イ) 低能 (Feeble mindedness) 意識は、正常意識より一段劣つたもの、即ち、良好な條件の下には、格別支障がないが、不良な條件の下には支障を來し、且この意識の稟有者は、正常意識の稟有者との競争に堪へ難いもので、廣義の低能者中最も多數を占めてゐる。

尙、低能者が特に一般人より劣るのは、概念判斷推理等の性能である。

(ロ) 愚鈍 (Imbecility) 意識は、低劣さが低能に次ぎ、成年に達しても兒童期位の知能にしか達しないもので、只良好な條件の下に於ての

み普通の生理的危険を防禦し得るが、獨立で生活を全うし得ず、且道德性を缺如するのを常とするものである。尙、愚鈍の數は、低能の半數及び白痴の三倍位の割合で存在し、且男子の方が女子よりも多いのを常とする。

(二)白痴 (Idiocy) 意識は、意識全體が極めて幼稚單純で、成年に達しても就學兒童の知能にも達せず、随つて普通の生理的危険に對しても自己を防禦し得ず、普通の會話をすら満足に爲し得ないものである。そして其の大多數は、先天的遺傳的原因(頭腦の過小・過大・軟化又は硬化や、親が大酒家又は微毒患者であることや、妊娠中の母の生理的並に精神的障害や、生産時の故障等に由來するもので、後天的のものは、生理的原因即ち頭部傷害や熱病や日射病等に由來するものである。尙、全體としては白痴に屬しながら、或る特殊的性能のみが異常に發達してゐるものを「白痴天才」(Idiot genius)と稱する。

(3)病的意識。病的意識は、狹義には、特殊の醫療を加へることなしには常態に復し得ない異常意識の義であり、廣義には、生理的原因より生起する極端な異常意識の義である。随つて、前記低能意識は勿論、高能意識及び社會意識の一部分は、廣義の病的意識に屬する。尙、大まかにいへば、如何なる意識にも病的状態の伴ふものであり、随つて、其の種類は極めて多大である。

病的意識を、原因から別てば、人爲的のもの(催眠現象)と自然的のものとなり、時間的立場から別てば、一時的のもの(疲勞酩酊眠・夢・錯覺・幻覺等)と永續的のもの(精神病・神經衰弱等)となり、數量的立場から別てば、個人的のものと集團的のもの(群集異常意識等)となり、性質的立場から別てば、全體的(二重人格等)のものと部分的のものととなり、後者は更に理知的のもの(感覺的のもの・知覺的のもの・思惟的のもの)と感情的のものと意的のもの、又は、性的のもの(變態性慾)と道德的のもの(犯罪意識)となる。これらの中最も重大な意味を有

するのは、變態性慾及び犯罪意識である。

本稿 心理學綱要終

(附錄) 研究問題

- (一) 心理學とは何ぞ。
- (二) 心理學の定義。
- (三) 心理學の意義。
- (四) 心理學の價值。
- (五) 心理學の語義。
- (六) 心理學の本質。
- (七) 心理學の方法。
- (八) 觀察法とは何ぞ。
- (九) 實驗法とは何ぞ。
- (一〇) 精神分析法とは何ぞ。
- (一一) 心理學の體系。
- (一二) 心理學の理論的價值。
- (一三) 心理學の實際的價值。
- (一四) 西洋に於ける心理學發達の概要。
- (一五) 代表國心理學の特色。
- (一六) 日本に於ける心理學發達の概要。
- (一七) 意識の本質。
- (一八) 人間の意識と動物の意識の差異。
- (一九) 意識と身體との關係を明かにせよ。
- (二〇) 主心的相制的並行論とは何ぞ。
- (二一) 神経系統について知る所を述べよ。
- (二二) 人格とは何ぞ。

- (二三) 人格の統一性。
- (二四) 自我とは何ぞ。
- (二五) 個性とは何ぞ。
- (二六) 性格とは何ぞ。
- (二七) 氣質とは何ぞ。
- (二八) 多血質とは何ぞ。
- (二九) 膽汁質とは何ぞ。
- (三〇) 神経質とは何ぞ。
- (三一) 粘液質とは何ぞ。
- (三二) 知能とは何ぞ。
- (三三) 知能の遺傳性。
- (三四) 知能指數について知る所を述べよ。
- (三五) 人格自我個性の定義を記し、且其の關係及び異同を明かにせよ。
- (三六) 性格、氣質、知能の定義を記し、且其の關係及び異同を明かにせよ。
- (三七) 注意とは何ぞ。
- (三八) 注意の方面。
- (三九) 注意の價值。
- (四〇) 注意の條件(主觀的條件及び客觀的條件)。
- (四一) 意志とは何ぞ。
- (四二) 意志の意義。
- (四三) 意志の本質。
- (四四) 意志の種類。
- (四五) 意志の發達。
- (四六) 執意とは何ぞ。

- (四七) 衝動とは何ぞ。
- (四八) 本能とは何ぞ。
- (四九) 本能の意義。
- (五〇) 本能の特質。
- (五一) 本能の種類。
- (五二) 感情とは何ぞ。
- (五三) 感情の意義。
- (五四) 感情の本質。
- (五五) 感情の價值。
- (五六) 感情と理知及び意志との關係。
- (五七) 感情の種類。
- (五八) 情緒とは何ぞ。
- (五九) 情緒の意義。
- (六〇) 情緒の種類。
- (六一) 情操とは何ぞ。
- (六二) 情操の意義。
- (六三) 情操の特質。
- (六四) 情操の價值。
- (六五) 情緒と情操との定義を記し、且其の異同を明かにせよ。
- (六六) 複合感情とは何ぞ。
- (六七) 單純感情とは何ぞ。
- (六八) 單純感情の三方向説を略述し、且これを批評せよ。
- (六九) 快及び不快について知る所を述べよ。
- (七〇) 理知とは何ぞ。
- (七一) 理知の意義及び價值。

- (七二) 理知の本質。
- (七三) 理知の種類。
- (七四) 知覚とは何ぞ。
- (七五) 知覚の意義。
- (七六) 知覚の特質。
- (七七) 知覚の種類。
- (七八) 知覚の發達。
- (七九) 錯 覺
- (八〇) 幻 覺
- (八一) 思惟とは何ぞ。
- (八二) 思惟の意義。
- (八三) 思惟の種類。
- (八四) 感覺とは何ぞ。
- (八五) 感覺の意義。

- (八六) 感覺の本質。
- (八七) 感覺の種類。
- (八八) 意志感情及び理知の異同を明かにせよ。
- (八九) 社會意識とは何ぞ。
- (九〇) 社會意識の意義。
- (九一) 社會意識の特質。
- (九二) 社會意識の種類。
- (九三) 異常意識とは何ぞ。
- (九四) 異常意識の意義。
- (九五) 異常意識の特質及び種類。
- (九六) 高能意識とは何ぞ。
- (九七) 低能意識とは何ぞ。
- (九八) 病的意識とは何ぞ。

附 録 終

昭和十四年四月二十日印 刷
昭和十四年四月廿五月初版發行

本「心理學綱要」
定 價 一 圓



著 者	稻 毛 金 七
發 行 者	拔 井 美 子 吉 <small>東京市牛込區早稲田鶴巻町</small>
印 刷 者	上 田 榮 吉 <small>東京市淀橋區戸塚町一ノ一三</small>

發 行 所

東京市牛込區早稲田
鶴巻町四百三十六番地

世 界 堂 書 店

電話牛込五五三二
振替東京四一〇八四

372
272

終

